科目分類	北東アジア超域研究総論			対象学年	1
授業科目	北東アジア超域研究総論			学期	春学期
代表教員	福原　裕二			選択/必修	必修(北東アジア専攻)
科目コード	H902101	授業形態	講義	単位数	2.0
授業の概要	この講義では、一国一地域に収まらない問題群を扱う「超域研究」を論じる。北東アジア研究科が考える「超域研究」とは、“何らかの「域」をこえて運動する事象や主体の拡散と収斂”に着目し、人文・社会科学の諸方法をもって行う研究である。担当者は、①それぞれが行っている超域研究にもとづく講義、②その研究に密接に関係する「超域的研究」の紹介と分析、を行い、受講生に「超域研究」を各自の研究枠組を構想する場合の一選択肢として理解させることをめざす。				
授業の内容	第1回 導入（全担当教員） この講義のねらい、講義進行、成績評価方法を説明したのち、各担当教員の講義内容を説明する。 第2～4回 福原裕二　【韓国・北朝鮮、予防外交と紛争、市民社会】 朝鮮半島をめぐる国際関係・紛争を事例的に検討するなかで、なぜ北東アジア研究に超域的視点が重要なのかを考えてみたい。ここで取り上げる国際関係・紛争とは、北朝鮮の核兵器開発問題と6者協議の挫折、そして日本に関わる領土問題である。まずは国際政治における超域的現象、そのなかでの拡散と収斂について思考をめぐらせてみる。これを踏まえ、北朝鮮の核兵器開発に内在する‘問題’の超域性、また日本をめぐる問題が秘める三重の超域性を明らかにしていく。最後に、問題の解決を多者安保体制、（海の）公共財化の観点（理想主義）から考察することで、北東アジア国際関係の構造と力学（現実主義の壁）を浮き彫りにする。 第5～7回 豊田知世　【資源エネルギー、経済発展と環境、地球環境問題、持続可能な開発】 経済発展の過程で発生する環境問題は、地域的な問題から国境を越えた地球規模の問題まで、さまざまな環境問題が発生している。本講義では、まず環境問題がなぜ発生するのか経済的な視点から説明する。そして、地域や地球規模の環境問題に対して、発展段階によってどのような特徴があり、またどのような環境政策が必要になるのか、いくつかの事例を挙げながら紹介する。ここではとりわけ、発展段階が異なる国間において、越境する環境問題の環境政策に着目しながら、経済成長と持続可能な開発に向けた政策の選択について考察していきたい。 第8～10回 江口伸吾　【現代中国、グローバリゼーション、脱領域化、政治統合】 本講義は、グローバリゼーションという現代国際社会の趨勢に着目しながら、北東アジアの国内社会で顕在化する<拡散－収斂>のダイナミックな政治・社会変動の超域的考察を試みる。とくに、現代中国の政治社会の変化を取り上げると共に、その変化が国際社会との連動性を高めていることに着目し、日本を含む北東アジア地域の変化の中で中国の国内社会の変化を位置づけなおす。また、本講義では、とくに政治学、地域研究の視点から北東アジアの政治社会を考察する一方、その主たる認識枠組みである国民国家(Nation-State)を批判的に考察し、超域的な視点から脱領域化する複合的な政治統合の方向性を考察する。 第11～13回 井上治　【モンゴル・歴史・文化触変】 機動性に富むモンゴル遊牧民たちは古来より周辺諸地域との交渉を活発に行い、数多くの文化交渉を経験してきた。これを超域研究の枠組でとらえ、外来文化の受容と既存文化の変容過程、変容から定着に至る過程、その定着した文化が新たな外来文化の影響で再び変容する過程やそれが他の地域に波及してゆく過程を“文化の拡散・収斂運動”としての「文化触変反復モデル」に仕上げ、超域文化理論に昇華させようとしている試みを論じる。講義ではまず文化触変理論を説明し、次にこのモデルによる事例分析を解説する。なお、もし時間があれば、絶滅危惧言語のことにも論及したい。 第14回 総括：北東アジア超域研究の展望（全担当教員） 講義で示された問題群を超域的に研究した結果、見えてくるものは何か。それは、“何らかの「域」を				

	こえて運動する事象や主体の拡散と収斂"の中に存在する人間とその営為の姿であろう。総括として、担当者全員が北東アジア超域研究を国家、そして、人間の存在そのものを問い直す学問として定置しようとする試みをめぐって議論を展開する。 第15回 ディスカッション（全担当教員） 講義を通じて体得した「超域研究」を受講生はどのようにとらえ、どう向き合うかを述べ、それをめぐって全員がディスカッションする。
テキスト	特定のテキストは使用しない。
参考文献	各担当教員は以下を参考文献として使用する。 （福原） 池内敏『竹島—もうひとつの日韓関係史』中公新書、2016年 沈志華（朱建栄訳）『最後の「天朝」：毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮（上）』岩波書店、2016年 沈志華（朱建栄訳）『最後の「天朝」：毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮（下）』岩波書店、2016年 福原裕二『北東アジアと朝鮮半島研究』国際書院、2015年 ドン・オーバード-ファー、ロバート・カーリン著、菱木一美訳『二つのコリア：国際政治の中の朝鮮半島』共同通信社、2015年。 木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』岩波書店、2015年 琉球新報・山陰中央新報『環りの海 竹島と尖閣 国境地域からの問い』岩波書店、2015年 本田良一『日ロ現場史 北方領土—終わらない戦後』北海道新聞社、2013年 道下徳成『北朝鮮瀬戸際外交の歴史1966～2012年』ミネルヴァ書房、2013年 濱田武士・佐々木貴文『漁業と国境』みすず書房、2020年 （豊田） バリー・C・フィールド『環境経済学入門』日本評論社、2002年。 ジョン・ディクソン他『環境はいくらか 環境の経済評価入門』築地書館、1991年。 D・H・メドウズ他『成長の限界：ローマクラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社、1972年。 マイケル・P・トダロ他著『トダロとスミスの開発経済学（原著第10版）』、ピアソン桐原、2010年。 ワールドウォッチ研究所 『地球白書（各年版）』ワールドウォッチジャパン、各年。 宇沢弘文・細田裕子偏『地球温暖化と経済発展—持続可能な成長を考える』東京大学出版会、2009年。 （江口） アジア政経学会監修／高原明生・田村慶子・佐藤幸人編著『現代アジア研究1／越境』慶應義塾大学出版会、2008年。 押村高賈任編集『政治の発見8／越える—境界なき政治の予兆—』風行社、2010年。 高原明生・前田宏子『シリーズ中国近現代史5／開発主義の時代へ1972-2014』岩波書店、2014年。 中園和仁編著『Minervaグローバル・スタディーズ3／中国がつくる国際秩序』ミネルヴァ書房、2013年。 西村成雄・田中仁編『現代中国地域研究の新たな視圏』世界思想社、2007年。 平石直昭編『丸山眞男座談コレクション』上・下、岩波書店、2014年。 川島真・小嶋華津子編著『よくわかる現代中国政治』ミネルヴァ書房、2020年。 （井上） 平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。 井上治「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察」、『北東アジア研究』別冊1、2008年。 金日宇『韓国・済州島と遊牧騎馬文化』、明石書店、2014年 デイヴィッド クリスタル『消滅する言語—人類の知的遺産をいかに守るか』、中公新書、2004年。 松原好次ら『言語と貧困—負の連鎖の中で生きる世界の言語的マイノリティ』、明石書店、2012年。 E.コセリウ『言語変化という問題——共時態、通時態、歴史』、岩波文庫、2014年。

評価方法	出席回数、授業やディスカッション参加への積極性、全講義終了後に提出を求める「超域研究による自分の研究テーマの展開」についてのレポート（4,000字～8,000字）の内容によって評価する。 <成績評価方法に関して> 以下の基準で採点し、各点を平均して成績を評価する。 ①出席について…欠席をしないこと。とくに第15回目の講義を欠席した者（全講義を通じて学んだことを確認できないため）、各講師が担当する4回の講義のうち2回以上欠席した者（当該講師の講義内容を半分以上理解していないと考えられるため）、には単位を与えない。全回出席した者には出席点100点を与え、1回欠席するごとに20点を減じる。出席点が59点以下の者（全15回の講義を通じて3回以上欠席した者）には単位を与えない。 ②講義中の態度…講義には積極的かつ真剣な態度で臨むこと。とくに第15回目のディスカッションの姿勢は評価の対象となる。各自5分以上（10分以内）のプレゼンテーションで、「超域研究」をどのように理解したか、「超域研究」はどのように各自の研究に生かせると考えているかを述べること。「超域研究」の考え方を自分の研究に生かせない場合にはその理由を述べること。ここでレジュメ作成は求めないが、各自メモを作成してくることが望ましい。要件を満たしたプレゼンテーションをおこなった場合には80点を与える。全員のプレゼンテーション終了後には受講生中心にディスカッションをおこなう。とくに、各自の「超域研究」に対する理解と研究への応用についての考え方を踏まえて、他の受講生のプレゼンテーション内容と担当講師の考え方に対する批評を歓迎する。ディスカッションにおける積極性に対して最高で20点の評価点を加点する。 ③レポート提出…全講義終了後、1週間以内に提出を求める。「超域研究による自分の研究テーマの展開」（4,000～8,000字）の内容を100点満点で評価する。期限までに提出しない者には単位を与えない。
参考URL	
その他	

科目分類	開発政策総論			対象学年	1
授業科目	開発政策総論			学期	春学期
代表教員	林　秀司			選択/必修	必修(地域開発政策専攻)
科目コード	H902102	授業形態	講義	単位数	2.0
授業の概要	開発政策に接近する仕方は、社会学、経済学、政治学と学問分野によりさまざまであるが、本年度の当授業の前半は、そのひとつとして、経済地理学からの接近法を取り上げてみたい。その際、社会科学に関する学習経験が少ない受講者を想定して、当該専門分野の基礎的な考え方を教科書を用いながら検討していくこととする。ただし、教科書以外の文献も随時利用する。授業形態は講義ではあるが、受講者の積極的な参加を期待する(以上、林)。 急速な経済成長を遂げている東(南)アジア諸国は、今後本邦企業にとっても重要なビジネス拠点となると予想される。しかし、これらの地域は先進国に比べれば、高速道路・空港・電力・ガスといった経済インフラは脆弱である。これまで、その整備は国の役割と考えられてきたが、国家財政が脆弱であるがゆえに国に頼ったインフラ整備に期待することはできない。そのため、工業化を進めるこれらの国々では、インフラ整備費用を民間部門から調達せざるを得ないのが現実である。他方、わが国においても、インフラ整備はほぼ終わり、今後は整備されたインフラをいかに維持運営するか、とりわけその場合におけるインフラの維持運営の主体と資金調達先をどのようにするかが問題である。国・地方とも財政が疲弊するなかで、従来のような公的主体に頼った資金供給は期待できない。そこで、本講義の後半では経済開発に不可欠なインフラ整備と維持運営にかかる資金調達について理解を深める。講義は指定教科書の輪読を行う形で進める(以上、西藤)。				
授業の内容	第１回 企業 第２回 イノベーション 第３回 産業立地 第４回 集積 第５回 地域格差 第６回 グローバル化 第７回 持続可能な発展 第８回 予備日 第９回 インフラ整備における国の役割① 第１０回 インフラ整備における国の役割② 第１１回 民間資金の調達① 第１２回 民間資金の調達② 第１３回 市場制度の設計と課題① 第１４回 市場制度の設計と課題② 第１５回 予備日				
テキスト	【林】 青山裕子・マーフィー, J. T.・ハンソン, S.著，小田宏信・加藤秋人・遠藤貴美子・小室譲訳 2014.『経済地理学――キーコンセプト』古今書院．Aoyama, Y., Murphy, J, T., Hanson, S. 2011. Key concepts in economic geography. London: Sage. 【西藤】 受講生と相談しながら教科書を指定する。				
参考文献	【林】 随時紹介する。 【西藤】 ・Grigg, N. S. (2010) Infrastructure Finance: The Business of Infrastructure for a Sustainable Future, Wiley. ・加賀隆一 (2010) 『国際インフラ事業の仕組みと資金調達—事業リスクとインフラファイナンス』中央経済社.				
評価方法	平常態度で評価する。（出席20%、課題80%）				
参考URL					

その他	